口腔内腫瘍

●プロフィール（犬）

・発生： 全腫瘍中3～6%、犬口腔内腫瘍発生率21／10万頭。

・発生腫瘍
[悪性]悪性黒色腫、扁平上皮癌、線維肉腫、高分化型線維肉腫、骨肉腫、リンパ腫、肥満細胞腫。
[良性]線維腫性エプリス、骨形成性エプリス、棘細胞性エナメル上皮腫、乳頭腫。

●プロフィール（猫）

・発生：全腫瘍中6%。

・発生腫瘍：①扁平上皮癌 60%、②線維肉腫 13～17%、③エプリス 7～8%
[悪性]扁平上皮癌、線維肉腫、悪性黒色腫。
[良性]誘導性線維エナメル上皮腫、石灰化上皮歯原性腫瘍、エプリス。

・TNM 分類（口腔前庭）

（T）原発腫瘍の大きさ	T1 ～2cm	a.骨浸潤なし	b.骨浸潤あり
	T2 2～4cm	a.骨浸潤なし	b.骨浸潤あり
	T3 4cm～	a.骨浸潤なし	b.骨浸潤あり

（N）所属リンパ節転移の有無

N0	所属リンパ節に浸潤なし		
N1	患側リンパ節が可動性	N1a 浸潤なし	N1b 浸潤あり
N2	対側または両側のリンパ節が可動性	N2a 浸潤なし	N2b 浸潤あり
N3	固着リンパ節		

（M）遠隔転移の有無 M0 遠隔転移なし
M1 遠隔転移あり

・ステージング

Ⅰ	T1	N0	N1a	N2a	M0
Ⅱ	T2	N0	N1a	N2a	M0
Ⅲ	T3	N0	N1a	N2a	M0
	Tに関係なく	N1b			M0
Ⅳ	Tに関係なく	N2b	N3		M0
	T Nに関係なく	M1			

口腔内腫瘍

【犬の悪性口腔内腫瘍】

【悪性メラノーマ】
・全口腔悪性腫瘍中30～40%で最も多い（1位）。
・年齢：平均11～12歳。
・品種：老齢の小型犬に多い。プードル、ダックスフンド、スコティッシュテリア、G・レトリバーなど。
・挙動：急速に成長、局所浸潤は強く早い、遠隔転移も強く早い。転移部位は主に肺。
・治療：第一選択は顎骨切除を含めた外科手術。外科、放射線、化学療法。
（外科）顎骨切除術　中央生存期間7.3～9.1ヶ月。
外科療法単独　術後1年生存率25%未満。
（放射線療法）低分割放射線療法で反応率約70%。
（化学療法）術後の補助的化学療法により遠隔転移を抑制し生存期間の延長を目指す。
・予後：予後は悪く、長期生存率も低い。
ステージⅠはⅡ・Ⅲに比較して約2倍以上の生存期間。

【扁平上皮癌】
・全口腔悪性腫瘍中20～30%（2位）。
・年齢：平均9歳。
・挙動：局所浸潤性は強く（70%、3／4で骨浸潤あり）、遠隔転移性は低い（10%未満）。
舌と扁桃に発生したものは浸襲性が高く、早期に遠隔転移を起こす。
・治療：第一選択は顎骨切除を含めた外科手術。外科、放射線、化学療法、BRM療法。
（外科）顎骨切除術　中央生存期間9～18ヶ月。
外科療法単独　術後1年生存率85%。
（放射線療法）放射線療法単独で中央生存期間9～12ヶ月。
（BRM療法）ピロキシカムで緩和的効果あり。
・予後：吻側に発生したものは治療により予後良好。
扁桃や舌根部など口腔尾側に発生したものは挙動悪く、高い転移率を示し予後不良。

【線維肉腫】
・全口腔悪性腫瘍中10～20%（3位）。
・年齢：平均7歳（6ヶ月齢でも報告有り）。メラノーマや扁平上皮癌よりも若くに発生。
・品種：G・レトリバーなど大型犬の上顎に多く発生。
・挙動：局所浸潤は強く骨浸潤多い。遠隔転移は比較的低く（約20%）、メラノーマと扁平上皮癌の中間。
・治療：第一選択は顎骨切除を含めた外科手術。外科、放射線、化学療法。
（外科）顎骨切除術　中央生存期間12ヶ月。
外科療法単独　術後1年生存率40～45%。
（放射線療法）外科療法と併用で術後1年生存率60%。
・予後：下顎に発生したものは上顎よりも良い。
若齢の犬では、高齢犬よりも進行性。

【骨肉腫】
・挙動：四肢の骨肉腫よりも転移が少なく、中央生存期間が長い。
・治療：下顎切除術：中央生存期間14～18ヶ月、1年生存率35～71%。
上顎骨切除術：中央生存期間5～10ヶ月、1年生存率17～27%、局所再発率83～100%。
多くが局所再発によって死亡する。

【臨床症例】

＊犬の悪性メラノーマ

・症例：パグ、13歳齢、雄。

・主訴：流涎、口腔内出血。

・症状：左上顎歯肉に腫瘤。

・検査：生検により悪性メラノーマと診断。
　　リンパ節転移・遠隔転移所見なし。

・臨床診断：悪性メラノーマ　T2b N0 M0　ステージⅡ。

左上顎の歯肉腫瘤

左上顎の歯肉腫瘤

・治療： 外科手術を提示するも希望せず、対症療法のみ。

・経過：病変拡大に伴い採食障害が発現しQOLは著しく低下、1ヶ月後に死亡。

【臨床症例】

＊犬の悪性メラノーマ

・症例：ミニチュアダックスフンド、17歳齢、雄。

・経緯：口腔内出血を主訴に近医を受診、口腔内腫瘍と診断され手術不可と言われる。
専門的診断および治療を希望して当院受診。

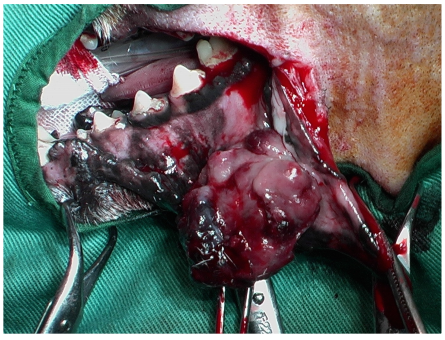
・症状：左口唇粘膜に腫瘤。

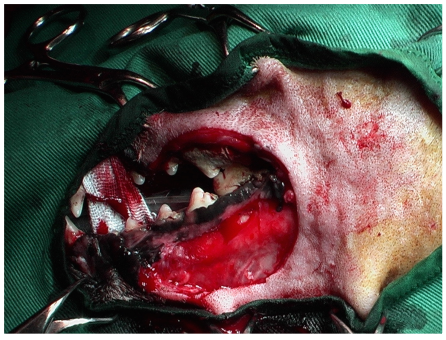
・検査：細胞診により悪性メラノーマと判断。
下顎リンパ節転移所見あり・遠隔転移所見なし。

・臨床診断：悪性メラノーマ　T2a N1b M0　ステージⅢ。

左口唇粘膜の腫瘤

左口唇粘膜の腫瘤





拡大切除

術後20日

・治療： 左頬部拡大切除術および下顎リンパ節切除。

・確定診断：悪性メラノーマ　T2a N1b M0　ステージⅢ。
マージンクリアー、脈管内浸潤なし。

・経過：補助的化学療法を提示するも希望せず、経過観察のみ。
良好なQOLを維持していたが術後5ヶ月に肺転移確認、 術後6ヶ月に死亡。
最後まで再発は見られなかった。

【臨床症例】

＊犬の悪性メラノーマ

・症例：シーズー、15歳6ヶ月齢、雄。

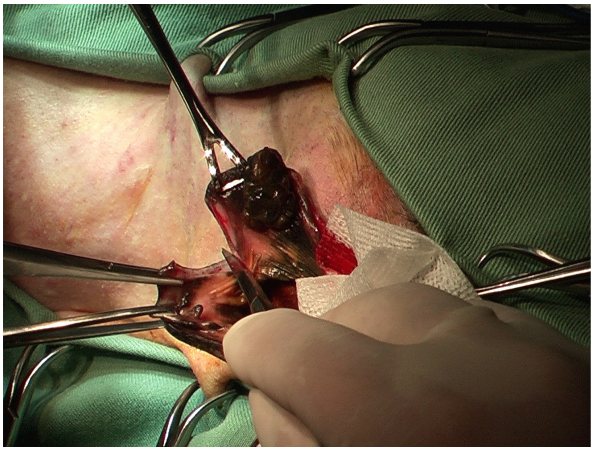
・主訴：2週間前に右口角の腫瘤に気づいた。

・症状：右口唇粘膜に腫瘤。

・検査：細胞診により悪性メラノーマと判断。
　　下顎リンパ節転移所見あり・遠隔転移所見なし。

・臨床診断：悪性メラノーマ　T2a N1b M0　ステージⅢ。

右口唇粘膜の腫瘤



拡大切除

術後

・治療：　右頬部拡大切除術および下顎リンパ節切除。

・確定診断：悪性メラノーマ　T2a N1b M0　ステージⅢ。
　　マージンクリアー、脈管内浸潤なし。

・経過：術後、カルボプラチンによる補助的化学療法実施。
　　術後2ヶ月に肺転移確認、 引き続き化学療法を継続、転移病変はその後穏やかな拡大を示すも良好なQOLが維持されて推移した。
　　術後1年7ヶ月に死亡、最後まで再発は見られなかった。

【臨床症例】

＊犬の悪性メラノーマ

・症例： ミニチュアダックスフンド、13歳8ヶ月齢、雄。

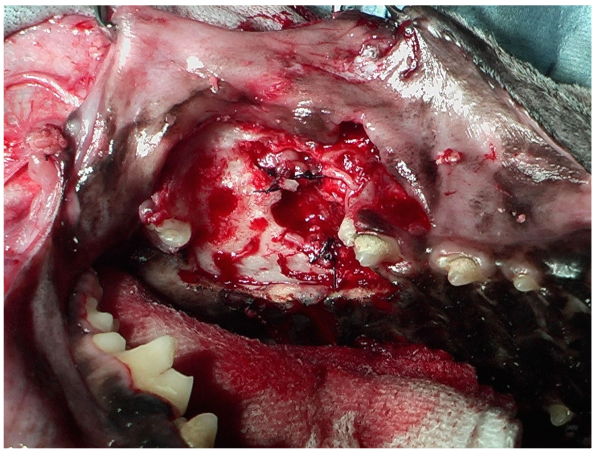
・主訴：1週間前に右頸部の腫瘤（右下顎リンパ節）に気づいた。
　　本日、口腔内腫瘤に気づいた。

・症状：右上顎歯肉に腫瘤、口腔内出血、一般状態良好。

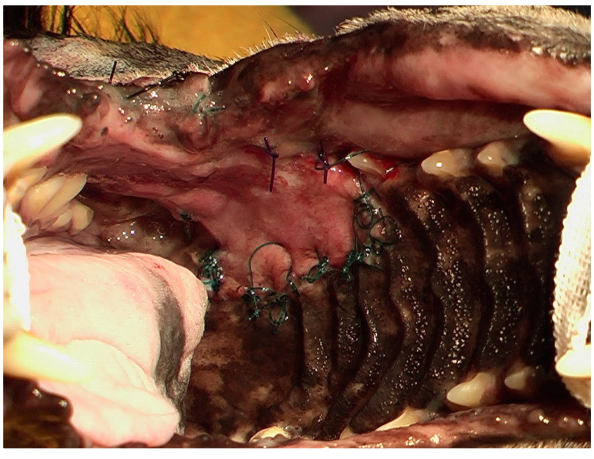
・検査：細胞診により悪性メラノーマと判断。
　　下顎リンパ節転移所見あり。
　　CT検査にて上顎骨浸潤あり、硬口蓋浸潤なし、
　　鼻腔内浸潤なし、肺転移を疑わせる微小肺病変2ヶ。

・臨床診断：悪性メラノーマ　T2b N1b M1　ステージⅣ。

右口唇粘膜の腫瘤



拡大切除



術後

・治療： 右上顎骨部分切除術および下顎リンパ節切除。

・確定診断：悪性メラノーマ　T2a N1b M1　ステージⅣ。
　　マージンクリアー、脈管内浸潤なし。

・経過：術後、カルボプラチンとドキソルビシンの交互投与による補助的化学療法実施。
　　術後2ヶ月半に胸部X線検査にて肺転移病変を複数確認、 術後4ヶ月に死亡。
　　最後まで再発は見られなかった。

【臨床症例】

＊犬の悪性メラノーマ

・症例： G・レトリバー、13歳8ヶ月齢、避妊雌。

・経緯：1年10ヶ月前に軟口蓋の潰瘍病変に気づき、近医を受診、しばらく経過をみていたが変化がなかった。
最近になって近医を受診した際に肉芽腫様の増殖病変が確認され、当院へ紹介受診。

・症状：左軟口蓋に腫瘤、左下顎リンパ節腫大、一般状態良好。

・検査：生検により悪性メラノーマと診断。
左下顎リンパ節転移所見あり・遠隔転移所見あり（肺）。

・確定診断：悪性メラノーマ　T2 N1b M1　ステージⅣ。

初診時

診断後5ヶ月

・治療：化学療法。

・経過：診断後、ドキソルビシンによる化学療法を開始。初回投与後に食欲廃絶が発現、以後カルボプラチンに変更。
カルボプラチン4回投与後、肺転移病変の拡大を認め、抗がん剤投与は中止。
以後、インターフェロン隔週投与を行う。
診断後10ヶ月に死亡。

【臨床症例】

＊犬の高分化型線維肉腫

・症例： W・コーギー、10歳1ヶ月齢、雄。

・経緯：3ヶ月前に左頬部の腫脹に気づいた。
最近になって腫れが酷くなってきた。

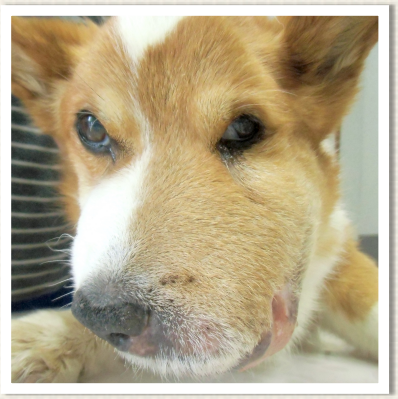
・症状：左頬部の腫脹、一般状態良好。

・検査：左上顎歯肉の粘膜下に硬固な腫瘤病変。
生検により高分化型線維肉腫と診断。
リンパ節転移所見なし・遠隔転移所見なし。

・確定診断：高分化型線維肉腫　T3 N0 M0　ステージⅢ。

・治療：各種治療法を提示するも希望せず、対症療法のみ。

1年9ヶ月後



1年9ヶ月後

・経過：病変拡大に伴い顔面変形、採食障害によりQOLは著しく低下、診断後1年9ヶ月に悪液質により死亡。

【臨床症例】

＊犬の骨肉腫（下顎骨）

・症例：G・レトリバー、11歳5ヶ月齢、避妊雌。

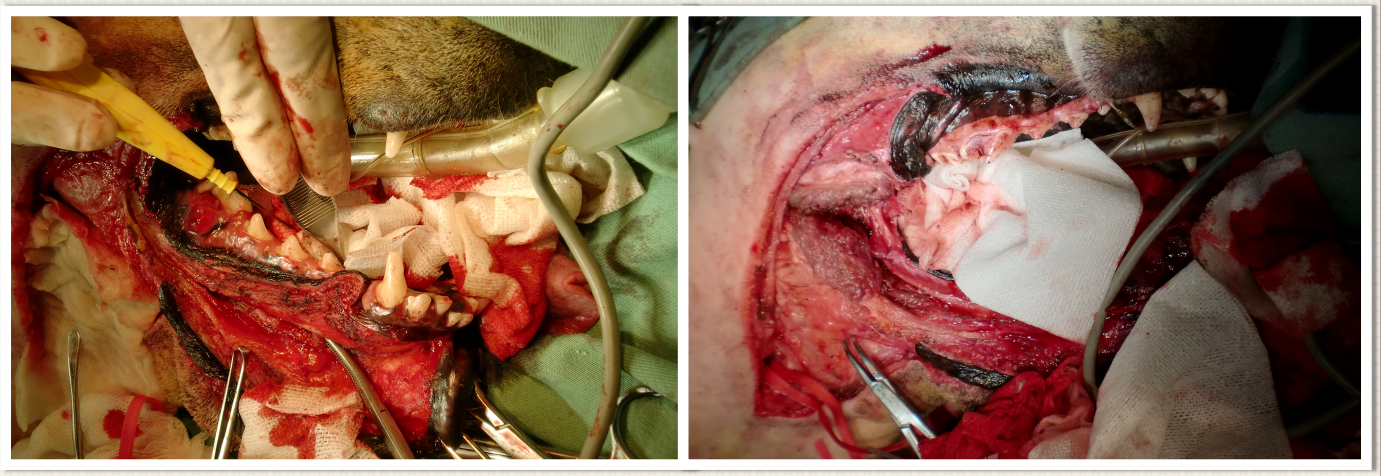
・主訴：口腔内出血。

・症状：右下顎歯肉に腫瘤、一般状態は良好。

・検査：生検により骨肉腫と診断。
　　リンパ節転移・遠隔転移所見なし。

・臨床診断：骨肉腫　T1b N0 M0　ステージⅠ。

右下顎の腫瘤



全片側下顎切除術

・治療：　全片側下顎切除術および下顎リンパ節切除。

・確定診断：骨肉腫　T1b N0 M0　ステージⅠ。
　　マージンクリアー、脈管内浸潤なし。

・経過：疼痛が無くなり良好なQOLを確保、自力採食可能。
　　術後、ドキソルビシンによる補助的化学療法を５回実施。
　　術後9ヶ月に乳腺癌（T1 N0 M0）、術後1年5ヶ月に肺転移が確認され、術後1年9ヶ月に死亡。
　　最後まで再発は見られなかった。

口腔内腫瘍

【猫の悪性口腔内腫瘍】

【扁平上皮癌】
・全口腔悪性腫瘍中60～80%（1位）。
・年齢：平均12歳。
・発生状況：（部位）1）舌（舌小体・腹側面）　2）歯肉（上顎・下顎の犬歯後方）。
　　（形態）潰瘍形成（++）、炎症（++）。
・挙動：局所浸潤性は強く早い（70%で骨浸潤）。
　　遠隔転移性は低い（局所病変による死亡のため転移発生は少ない）。
・治療：単独治療では効果低い。外科、放射線、化学療法。
　　外科切除 + 放射線治療の併用または放射線治療 + 化学療法の併用が最長の生存期間。
　　（外科）顎骨切除術　再発までの期間1～5ヶ月。
　　外科療法単独　術後の1年生存率は10%。
　　（放射線療法）メガボルテージで中央生存期間3ヶ月。
　　（化学療法）
・予後：予後不良。

【線維肉腫】
・全口腔悪性腫瘍中10～20%（2位）。
・年齢：平均10.3歳（1～21歳）。
・挙動：局所浸潤性は強く、骨浸潤多い。遠隔転移性は低い。
・治療：第一選択は顎骨切除を含めた外科手術。外科、放射線、化学療法。
　　（外科）顎骨切除術が必要。
　　（化学療法）
・予後：進行度による。

【臨床症例】

＊猫の扁平上皮癌

・症例：日本猫、16歳齢、避妊雌。

・主訴：食欲不振。

・症状：食欲不振、口元の疼痛。

・検査：左下顎に硬固な腫瘤を触知、舌下部まで浸潤。
生検により扁平上皮癌と診断、食道チューブ設置。
リンパ節転移・遠隔転移所見なし。

・臨床診断：扁平上皮癌　T2b N0 M0　ステージⅡ。

左下顎の腫瘤

舌下部まで浸潤

・治療：ビスフォスフォネート製剤投与による緩和治療。

・経過：疼痛が緩和されQOLが改善するも局所病変の拡大により徐々にQOLが悪化。
診断後3ヶ月に死亡。

【臨床症例】

＊猫の線維肉腫

・症例：アメリカンショートヘア、11歳齢、雄。

・主訴：1ヶ月前に口腔内腫瘤に気づく。徐々に拡大してきた。

・症状：口腔内腫瘤。

・検査：右吻側上顎に腫瘤病変を確認。
　　生検により線維肉腫と診断。
　　リンパ節転移・遠隔転移所見なし。

・臨床診断：線維肉腫　T2b N0 M0　ステージⅡ。

右上顎の腫瘤

切除生検

・治療：顎骨切除を含めた拡大切除術を提示するも希望せず、対症療法のみ。

・経過：徐々にQOLが悪化、診断後2ヶ月に死亡。

【臨床症例】

＊猫の悪性メラノーマ

・症例：チンチラ、15歳齢、去勢雄。

・主訴：2週間前から流涎、口腔内腫瘤に気づく。徐々に拡大してきた。

・症状：流涎、口腔内腫瘤。

・検査：右上顎歯肉に腫瘤病変を確認。
　　生検により悪性メラノーマと診断。
　　リンパ節転移・遠隔転移所見なし。

・臨床診断：悪性メラノーマ　T1 N0 M0　ステージⅠ。

右上顎歯肉の腫瘤

右上顎歯肉の腫瘤

・治療：メトロノーム化学療法（低用量CPM + メロキシカム）を実施。

1ヶ月後

1ヶ月後

・経過：化学療法開始後1ヶ月には病変が縮小し良好なQOLを維持。
　　診断後3ヶ月に死亡。